ヒアルロン酸注入による豊胸術の未来は？

山口 悟
Satoru Yamaguchi
ナグモクリニック名古屋

乳房へのヒアルロン酸注入が我が国で本格的に始まり11年が過ぎた。ヒアルロン酸注入による豊胸術は、シリコンバックによるものとも脂肪注入によるものとも違う、Fillerによる豊胸術の代表格として、今日までに確固たる地位を築いてきた。
我々は、2007年よりQmed社の製品SubQから使用を開始した。手術時間が短い、傷が目立たない、ダウンタイムが短いことから、これまで豊胸術に抵抗を抱いていた新たな患者層を開拓してきた。当初は吸収が早い、乳房内に硬い瘢痕を残す、被膜拘縮様の変化を引き起こす、時に健診に支障をきたすなど、問題点もあった。今日までに、注入方法を進化させ、様々な製品がリリースされてきた中で最適な製品を選別し欠点を補ってきた。当院では術後に定期的な検診も合わせて行い、注入されたヒアルロン酸の継時的変化も記録してきた。製品を特徴付ける因子 : 濃度、平均粒子サイズ、分子量、架橋率、架橋材には特に注目して至適な組み合わせを探し出し製品を進化させてきた。
ヒアルロン酸注入による豊胸術は、現在二つの問題点に直面している。

1．乳癌と診断されるケールが散見されてきた
2．無菌性の乳房の炎症をきたし、吸引抜去を余儀なくされるケースが出現してきた

そこで今回は、当院におけるヒアルロン酸注入法の変遷と使用製品の変遷を振り返り、ヒアルロン酸豊胸術が持つ問題点を検討し、ヒアルロン酸豊胸術の今後を占いたいと思う。